

血潮と糠

野村胡堂

—

「親分、面白い話がありますぜ」

ガラツ八の八五郎、銭形平次親分の家へ吠鳴り込みました。

「相変らず騒々しいな、横町の万年娘が、駈落したって話なら知っているよ」
銭形の平次は、恋女房のお静に顔を当らせながら、満身に秋の陽を浴びて、うつらうつらとやっているところだったのです。

「へッ、そんなつまらない話じゃねえ。——ところでお静さん、——いや姐御あねごって言うんだっけ——、親分の顔を剃あるのはよいが、右から左からいい男おとこつ振りを眺めてばかりいちや、剃そり上げないうちに、後から後から生揃はえそろって来ますぜ、

へッへッへッ」

「まア、何んという口の悪い八五郎さんだろう」

お静は真つ赧かになつて俯向うつむきました。赤い手絡、赤い襷たすき、白い二の腕のそを覗のぞかせて、剃刀かみそりの扱かいようも思おもいの外器用がまそうです。

「八、からかつちやいけねえ。そうでなくてせえ、危あやつかしくて、冷々ひやひやして
るんだ」

「まア」

とお静。

「先刻も、止せばいいのに自分で襟あたを剃あつて、少し剃刀を滑すべらしたんだ」

「自分の粗相そそうにしても、姐御あねごの頸筋くびすじへ傷きずを付けるのは虐むじたらしいねえ」

「その血染ちぢみの剃刀で俺おれの髭ひげを当あつてゐるんだから、一つ間違まちがつて手が滑すべると夫おつと婦心中おんなこころだ、ハッ、ハッ、ハッ」

平次はそんな気楽なことを言つてカラカラと笑つております。

「まア」

お静は又赧あかくなりました。

「だがね、親分、仲のいい夫婦だからいいよなもの、他人同士じゃ血と血が刃物の上で交まじるのは縁起が悪いと言いますぜ」

「そんな事を担かつぐ人もあるだろうよ。第一血染めの剃刀で当られちゃ気味が良くないやネ、——ところで八、手前てめえが触れ込んで来た面白い話つてえのは何だい」

平次は職業意職に返りました。剃あつた後で顔を洗つて、綺麗に拭き取ると、煙管きせるを伸ばして、縁側の日向へ煙草盆を引寄せます。

「あッ、忘れていた」

ガラッ八は自分の掌てでピシリと頬を叩きました。人間は少し甘い、不思議

にいい耳を持ったガラツ八は、平次に取っては申分のない見る目嗅ぐ鼻だったのです。

「忘れるようじゃ、どうせたいした話じゃあるまい」

と平次。

「ところが大変なんで。野垂れ死をした若い物貰いが、百両持っていたんだから驚くでしょう。自慢じゃないがこちからは、人様の袖に縫ったおぼえはないが、どうかすると百文も持っていねえことがある」

「自分に引くらべる奴があるかい、——だが、筋は面白そうだね、もう少し詳しく話してみるがいい」

平次も少し乗出しました。

「たったそれっきりの話さ、種も仕掛もねえところがこの話の取柄で」

「種も仕掛もねえことがあるものか、貰い溜めたにしても百両は大金だ。五年

や十年で溜まるわけがねえ、——今お前めえ、若い物貰いと言つたろう」

「なあーる、恐れ入つたね、さすがに銭形の親分だ。若い乞食が百両溜めるわけはねえとは理窟りくつだね」

「感心していちゃいけねえ、その百両は小粒か、小判か、それとも証文か」

「それが小判なんで、封も切らずに二十五両包が四つ、外に貰い溜めらしい銭が二三百ありましたぜ」

「何？ 小判で百両？ それが種も仕掛もない話かえ。大泥棒が仇討あだうちじやあるまいし、お菰こもが小判で百両持っているわけがあるもんか」

「成程そう言えばその通りだ、——親分も知っていなさるでしょう、観音様の裏あみがさこじきにいる編笠乞食」

「ウム」

「業病ごうびょうに取っ付かれて、人に顔をさらさないが、物貰いにしちゃ色の白い、何

となく身体に品のある若いのがいましたろう」

「それが死んだのかい」

「道端に坐つて、朝から晩までお経きょうを読んでいたのが、何か食い物でも悪かつたか、今日の昼頃ひるまじりのた打ち廻まわつて死んでしまつたそうです。誰も構かまい手がねえから、まだ菰こもをかけてありますよ——先刻町役人立ち合あいで調べて見ると、胴どう巻から二十五両包が四つ飛出としやがった。百両も持つてる癖くせに、何だつてまた物貰もらいの真似まねをしやがるんでしよう、罰ばちの当あたつた野郎やろうじゃありませんか」

「そいつは曰いわくがありそうだ、もう一度行いつてみる気はないか」

「行いきますとも、親分おやぢと一緒になら」

ガラツ八は飛上とがりました。最上等りょうけんの獵犬りょうけんのように、鼻はなさえもヒクヒクさせ
ております。

神田から浅草へ、近い道ではありませんが、悠長な時代で、平次が行き着くまで、行倒れの死骸はまだ取捨てる段取にもならず、町内の番太が、迷惑そうな顔をしながら、寄って来る弥次馬を追っ払っておりました。

「これは銭形の親分、——高が物貰いの行倒れで、御手に掛けるような代物じゃ御座いませんよ」

「どうせそうだろうが、商売冥利にちよいと見て行こう——小判で百両も持っていたっていうじゃないか」

「へエ——、大層溜めやがったもので、番太で駄菓子を売るよりは、余っ程歩がいいと見えますよ、へッへッへッ、——金は町内の旦那方が預ってあります、何なら——」

「いやそれには及ばない、小判は物貫いの懐から出ても小判に間違いないまい」
 平次はそう言いながら、往來の人の疎まばらになつたところを狙つて、ヒョイと菰こもを捲り上げました。

中には古綿をつくねたような、見る影もない乞食の死骸——と思うと大違ひ、苦悶くもんに歪ゆがんで、妙に怪奇な身体の恰好になつておりますが、年の頃二十五六の、何となく美男という感じのする男の死体です。

それに、病気のせいもあつたでしょうが、乞食にしては色も白く、業病業病といつても、ところどころ不気味な斑紋はんもんはありますが、それも大したこともなく、見た感じは、それほど醜みにくくもなつておりません。

唯ただ平次が驚いたのは、死骸は素人の眼にも異常で、毒死どくしの跡がはっきり判ることだつたのです。平次も日頃『検屍弁疑けんしべんぎ』位は読んでおりますが、その中の毒死どくしの幾項いくこうかは、この死骸にはつきり現れているような気がするのです。

「医者に立ち合つて貰つたかい、爺とつさん」

「いえ、それどころじゃありません、旦那方は秋祭りの支度で眼が廻る騒ぎで

番太の親爺おやしは心得たことを言います。

「八、検屍のやり直しというわけにも行くまいが、町役人にそう言つて、念のため町内の本道を連れて来てくれ。道端の物貰いに毒を飲ませて、懐中の百両を盗らずに行くなんかは、少しおかしいよ」

「よし来たッ、町役人が文句を言つたら八丁堀まで飛んで行って、笹野の旦那に江戸一番という医者を連れて来て貰おうか」

「馬鹿だなア、八丁堀まで行つちや日が暮れるじゃないか、丁寧に頼むんだぞ」

「心得てるよ、親分」

ガラッ八は横つ飛びにスツ飛んで行きましたが、どう話をつけたものか、間

もなく町役人と坊主頭の医者を一、手を引張るようにして連れて来たものです。

医者は屍体の眼を見、唇を見、爪つめを見、それから全身を調べて、薬箱から取出した銀の簪かんざし、それを何やら薬液やくえきに浸して屍体の口に入れ、暫くして取出して、水で洗って、

「フォーム」

と眺めております。

「毒は何でしょう」

「そこまでは判らないが、毒を飲まされて死んだ事に間違いはない、この通り」
「医者ぎんかんざしの差出した銀簪を見ると、成程その先が青黒く色変りがしております。

「死んだ後で口の中へ毒を入れたのじゃありませんね」

「そんな事はない。爪の色、眼瞼まぶたの中がまるで違う」

「有難う、飛んだ手数をかけました」

平次は丁寧^に医者を送り返しました。

「親分、大変な事になったね」

ガラツ八は妙な行掛りに、すっかり面喰っておりませぬ。

「八、この男の身許みもとを洗ってくれ、生れながらの物貰いじゃあるめえ」

「そんな事なら訳はありません」

ガラツ八は足を宙に飛んで行きます。

三

「親分、大縮尻おおしくじりさ。こんなヒドい目に逢ったことはねえ」

ガラツ八が帰って来たのは、それから一刻ばかり経った時分、四方はすつか

り暗くなつて乞食の死骸も取片付けてしまつてからでした。

「解らないのか」

番太の小屋でガラツ八の帰りを待つていた平次、幸先さいさきが悪いと見たか、やおら立上がつて、煙草入を腰に落します。

「小屋頭こやがしらを尋ねて、編笠乞食あみがさこじきの身許みぎを訊いたが、どうしても言わねえ。堅氣かたの方が身を落したのは仲間の定法で元の名前は申上げられません。どうせ、こうなつた身体だから、そんな事はどうでもいいじゃ御座いませんか。それに、あの編笠野郎は、余程深い仔細しさいがあると見えて、自分からも言いません——とこ
う吐ぬかしゃあがる」

「フム」

「その代り遺骸なきがらはこつちで引取り、回向えこう万端手落なく致させます——てやがる。お貰いの仲間にも、坊主も穴掘りもいるんだつてネ、親分」

「そんな事はどうでもいい、が、変死人と解つても、身許が解らなきやア、何にもならない」

「ところが、親分、面白い話を聞込みましたぜ」

ガラツ八は、例のキナ臭いような鼻をしました。これは何か嗅ぎ出した時の表情です。

「何だ、八、物惜みものおしをせず、言つてしまいな」

平次も少し不機嫌です。

「あの編笠乞食のところへ、毎日一度ずつ様子を見に来る娘があるんだつてネ」

「何？ 誰がそんな事を言った」

「筋向うすしむこの駄菓子屋の婆アがそう言っていましたよ。初めのうちは気が付かなかつたが、近頃は毎日食べ物を持って来てやるから、ツイ顔を見る気になりましたつて、——とんだ綺麗な娘だつて言いますよ」

ガラツ八は到頭大変な事を嗅ぎ出して来ました。

もつとも、こんな騒ぎが始まると、大抵の人は掛り合いを恐れて、知ってる事も黙ってしまったのが人情ですが、ガラツ八の調子が開けっ放しで、人間が如何にも邪念じゃねんがなさそうなので、相手になつていると、うっかり舌したを滑らしてしまふのでしよう。それがガラツ八の取柄で、銭形平次に重宝がられている原因でもあつたのです。

気さくな平次は、すぐ駄菓子屋へ飛んで行きました。反そつくり返つた箱の中から、駄菓子を二三十文選り出させて、観音詣りの土産物ていさいといった体裁ていさいに包ませながら、

「お婆さん、編笠乞食のところへ来る娘さんは、ありや何だろうねえ、大層な容貌きりようだつて評判だが——」

「親分はよく御存じで、町内にもあの娘の事を知っているのは、そうたんとは

ありませんよ」

駄菓子屋の婆さんの舌は、思いの外滑らかにほぐれます。商売冥利みょうり、お客への世辞のつもりだったかも知れません。

「幾つ位に見えるだろう」

「十九やくそこそこ、丁度にはなりませんねえ」

「身分は何だろう。男には眼の届かないところがあるものだ、お前さんが見たら判るだろう」

「それがね、親分、側へ寄って見たわけでも、声を掛けたわけでもありませんから、判然はつきりしたことは申上げられません、着物の好み、髪形などから見ると、おおだな下町の大店のお嬢さんというところじゃ御座いませんか」

「成程、——とところで、編笠乞食との間柄は何だろう。兄妹きょうだいとか、許嫁いいなづけとか、話ぶりで見当は付かなかつたらうか」

「それがネ、親分、こんなに離れていちゃ、聞こうと思っても聞えやしません。裏の井戸端にいる嫁の話声はよく聞えるんですが——」

しゅうとこんじょう

「姑根性——と言うものでしょう、ガラツ八は危うく吹出すところでした。」

「今日も何か食い物を持って来た様子かい」

「へエ、竹の皮包にして、お寿すゐもじか何か持って来た様子です。お昼少し前でしたよ」

「確かにそれを食たつたろうね」

「娘さんの後姿を伏し拝むようにして食べてましたよ」

「で、その後で苦しみ始めたんだね」

「お鮎すしを食べて小半刻も経ちましたかしら、暫くはそれでも我慢している様子でしたが、到底たまらなくなつたと見えて、地べたを這い廻るようにして苦しみ出しました。見ちゃいられませんでしたよ」

「有難う、それだけわかりや、大助かりだ」

平次はホツとした心持になったのでしよう、思わず岡っ引の地を出して、こんな事を言つてしまいました。

四

「八、今日は大事な仕事だ。縮尻しくじるような事があつちや、取り返しが付かない」

「親分脅おどかしたつこなしに願いますよ、一体どんな野郎と噛み合やいいんで――

――？」

「喧嘩けんかじゃないよ、あの娘の後を跟つけて、どこへ納まるか見届けりやあいんだ」

「へエ――」

ガラツ八は眼を見張りました。よくもこう目が届いたものです、花川戸の方から入って来た娘、町一杯に見通す位置に身を潜めて、路地の口から、こちらを眺めているのを平次は指しているのです。

事件の翌る日、変死した乞食の身許を洗いようがないと解ると、平次は最後の手段として、馬道に朝から張り通して今日も来るかも知れない娘を待ったのでした。

「——身に覚えがなきやア来るに決っている。覚えがあつても、下手人は後の様子を見たがるから、きつと来る——」

そんな事を言つて、半日路地に立った平次とガラツ八は、昼少し前漸く酬いられて、目差す娘が白日の下に現われたのを見付けたのでした。

「綺麗だね、親分、あれを跟けるのは朝飯前だが、あんなに綺麗じゃ跟ける方で気がさす」

「何をつまらない、——それ、諦めて帰って行くだろう。覚られちゃ打ちこわしだ、そつと跟けて行け」

「合点、これも役得さ。同じ跟けるなら、綺麗な新造の方がどんなに心持がい
いか判らない」

八五郎は駆け出しました、が、思い直した様子で立止ると、裾を七三に端折つて、手拭でヒョイと顔を包んだものです。ポカポカする秋日和、頬冠りは少し鬱陶しいが、場所柄だけに、少し遅い朝帰りと思えば大して可笑しくはありません。

「銭形の」

不意に平次の肩を叩いた者があります。

「あ、三輪の親分」

振り返ると、ニヤリニヤリと四十男が、平次の顔と、駆けて行くガラッ八の

後姿を半々に眺めております。

三輪の万七という顔のいい御用聞、石原の利助が隠居してからは、銭形の平次を向うに廻して、事毎に手柄を争っている男だったのです。

「大層な手柄だってネ、行倒ゆきだおれの乞食の懐から小判で百両出たという話には驚かないが、その行倒れを毒死と睨んだ平次親分の目には恐れ入ったよ、——ここは馬道だから、筋を言や俺の縄張りだが、そんなケチな事は言わねえ、まア、折角やんなさるがいい。あの乞食が大名おとの落し胤だねだったりした日にや、大変な事になるぜ、ハッハッハッ」

万七はもう一つ若い平次の肩をポンと叩くと、言いたいだけの事を言っ
てクルリと、踵きびすを返しました。

「——」

平次は眉ひそを顰ひそめましたが、妙に万七の様子に自信があるので、うっかりした

事が言えません。

それから半刻ほんときばかりすると、ガラツ八は埃ほこりと汗あせに塗まみれて飛んで来ました。

「親分ッ」

「何なにといういざざまだ」

「口く惜やしいよ」

「口惜しくたつて、泣く奴があるものか、大の男が——、娘を見失つたろう」

平次に凶星を指されたのでしよう。

「見失つたんじゃねえ。娘の後を跟けて、浅草橋御門を出るといきなり横合から飛出した野郎が、ドカンと突き当るんだ」

「尻餅しりもちをついたろう」

「尻に泥が着いているから、そんな事を言い当てたところで自慢にならねえ、

——ね、親分、その突当つた野郎は、あつしが起上がると胸倉を掴んで、ポカ

ポカッと来やがるじゃないか」

一刻者ごくもののガラツ八は、すっかり腹を立てて、親分の平次にまで食ってかかりそうです。

「それがどうした、八、落着いて物をいえ、大事なところだ」

「その野郎を誰だと思いなさるんだ。親分、三輪みのわの万七の子分、お神楽かぐらの清吉だろうじゃないか。——手前てまえの親分の平次は、三輪の縄張を荒らして、事毎に恥をかかせやがる。今度という今度は、その敵かたきを討ってやるから、覚えていろつてやがる」

「何だと八、敵を討つ？」

「清吉の野郎は確かにそういいましたよ、親分、身に覚えがありますかえ」

「馬鹿、敵の覚えなんかあったたまるものか、——それから娘はどうした」

「そんなに揉んでいるんだもの、女の足だって請合うけあい箱根の関を越す」

「つまらない事をいうな、到頭縮尻りやがったろう」

「だって親分」

「三輪の子分なんかに係合かかりあっているから悪いんだ。そんな時はな、八、後学のために言つて置くが、殴なぐられ損にして逃げ出すんだ」

「見ろ、埃と汗と涙で、台無しじゃないか。往来の人が見て笑っているぜ」

「よくその扮装なりで、浅草橋御門から駈けて来たものだ。そつちを向きな」

口小言を言いながらも、平次の眼も泣いておりました。汚よごれ傷きずついて来た飼犬でもいたわるように八五郎の身体をクルリと廻して、せめてもの埃を叩いてやっております。

「親分、あつしは口惜しい」

「何をつまらねえ、——三輪の親分が、神田か日本橋で、何か嗅ぎ出したんだろう、——とところで、八、ここから浅草橋まで行くうち、娘は後ろを振り向いて見なかったか」

「後ろを振り向くどころか、横顔も見せねえ。お重詰らしい風呂敷を持って真っ直ぐに行きましたよ、あんまり後姿が綺麗だから、何遍か前へ駈け抜けて顔を拝もうとしたが——」

「馬鹿、そんな心掛けだから、お神楽の清吉に殴なぐられるんじゃないか」

「親分、何とか敵を討っておくんさい。あのお神楽の野郎、あつしの鼻へ指を突っ込みやがって、勘弁ならねえ野郎だ」

「ウ、フ、お前の鼻を見ると、指位突っ込みたくなるだろうよ。踵かかとでなくて仕合せだ、まア、勘弁してやれ」

「ね、親分、せめてあの娘の家だけでも判りやア」

「その位のことならわけはないよ。三輪の万七親分か、お神楽の清吉の後を跟けていりゃア、日の暮れるまでにはきつと判る」

「有難てえ、それじゃ親分」

ガラッ八は又飛び出しました。

五

娘の素姓はすぐ判りました。

横山町の米屋——といつても、金貸の方で名高い万両分限ぶげん、越後屋佐兵衛の跡取娘お絹あととり、弁天べんてんとも小町とも、いろいろの綽名あだなで呼ばれる、界隈かいわい切つての美人あまだったのです。

編笠あみがさ乞食こじきの素性も、それにつれて次第にはつきりしました。

越後屋の手代弥三郎と言つて、二十五。主人の佐兵衛が、今から二十五年前、観音様へ朝詣りをした時、かみなりもん雷門の側に捨ててあつたのを拾つて、そのまま自分の子とも、奉公人ともなく育てたのでした。

佐兵衛夫婦は丁度生れたばかりの総領を喪なくして、悲歎にくれている時だったので、そのまま総領の乳母を留め置いて弥三郎を育てました。間もなく、姪めいのお絹を貰つて、跡取娘ということにしたのです。

二人は負けず劣おとらず美しく可愛らしく育ちました。弥三郎は素姓も判らぬ拾い子ですが、これもり維盛様のような美男、お絹とは似合めおとびないの夫婦雛を見るようで、主人の佐兵衛も妙に許したような眼で見、二人の間柄も、淡い友愛から、次第に濃い恋へと變つて行くのが、店の人達の眼にも、はっきり判るのでした。

そこへ主人の遠縁に当る、新助というのが割り込んで来ました。年は二十七、散々他の店で苦勞して商売にも賢かしこく、人柄がまことに実直で、二三年の間に、

すっかり弥三郎の占めていた地位を奪い、縁続きの関係があるにしても、今では番頭の茂助、支配人の民五郎に次いで、店にはなくてはならぬ人になって来たのです。

茂助は四十年も勤め上げた商売一点張の老人、支配人の民五郎は、佐兵衛の弟で、これは一と癖くせも二た癖もある人間、若い時は随分放埒ほうらつな暮しもしたようですが、今ではすっかり堅くなって、兄の佐兵衛を助けて、家業大事に励はげんでおります。

弥三郎は、妙に自分の不安定な地位を考えさせられる頃から、肉体の上にも、恐ろしい変化と崩壊ほうかいが始まっていたのです。

出入りの医者いしやに診て貰って、それは、当時では癒なおりようのない業病しうびょうと知った時の、弥三郎の驚きはどれ程だったでしょう。医者いしやの口から漏もれるともなく、この事が家中に知れ渡ると、弥三郎はもういても立ってもいられない心持に

なつておりました。

親無し子を拾つて、これまで育ててくれた大恩を思うと、この上越後屋に踏み止つて、家族に迷惑をかけることは、血をわけない間柄だけに、弥三郎には忍びないことでした。

その上、まだあまり醜みにくくならぬうちに、お絹とも別れて、美しい記憶きおくだけでも残そうというのが、せめてもの弥三郎の望みだったのでしよう。

全国の霊場を巡めぐつて、せめては後生を願おうといった、悲しい決心を定めると、佐兵衛の引止めるのも、お絹の歎きも振り切つて、弥三郎は越後屋を飛出してしまいました。

それは三月ばかり前のこと、餞別せんべつに貰つた小判の百両を懷中に深く秘め、編笠あしに面体を隠したまま、先ず日頃信心する観音様の近くに陣取つて心静かにうろ覚えおぼのお経きょうを誦ずしながら、——せめては後世を——と悲しくも祈っているの

でした。

業病を遺伝と思ひ込んだ当時の道徳では、弥三郎の態度はまことに見上げたものだったに相違ありません。

ところが、野天に寝て、不味まずい物を食うようになってから、不思議に弥三郎の病氣は癒なおって行きました。全く治ったわけではありませんが、次第に身も心も軽くなって、年内に元の身体になるかも知れないと思う未練みれんが、弥三郎を江戸から一步も踏み出させなかったのです。

お絹は人伝ひとづてに弥三郎が観音様のあたりにいると聞くと、矢も楯たてもたまらず、横山町から毎日のように逢いに来ました。

頑固かたくなな弥三郎は、部屋住のお絹が持つて来る金などは、どうしても受取らなかつたので、何時の間にかやら、毎日変った食物を持つて来て、弥三郎が編笠かたむを傾けてそれを食うのを、お絹は遠くから眺めて涙ぐんでいるようになったの

です。

そのお絹の持って来た^{すし}寿司で弥三郎は殺されたのです。平次はこれだけの事を探ると、深々と手を拱^{こまぬ}いて考え込みました。

六

平次は、兎に角横山町の越後屋に乗込んで行きました。今はおちぶれた弥三郎には相違ありませんが、自分の縄張り内に、人一人殺した下手人が、息を吐^ついていると思うと、我慢がならなかったのです。

「あッ、銭形の親分、よくお出で下さいました。丁度今弟と相談して、お願いに上がろうというところでした」

主人の佐兵衛はよく禿^はげた前額^{ひたい}を叩くように、薄暗い奥から飛んで出ました。

「何か変わったことがありますか」

平次も少し面喰らいます。

「三輪の万七親分がいきなりやって来て、弥三郎を毒害した覚えがあるだろう——つて、娘のお絹と甥おいの新助を縛って行きました。そんな馬鹿なことがあるものですか」

佐兵衛はカンカンになって平次にまで食ってかかりそうです。

「親分、家出をして物貰いにまで身を落しているものを、何を物好きに殺す奴があるものでしょう。兄が腹を立てるのも無理じゃ御座いません」

民五郎も口を添えました。若い時分は上方から九州までも放浪して、身に余る野心を抱いたこともあります。今ではすっかり落着いて、兄の莫大ばくだいな身上を切り廻して、何かから何まで指図をしている四十男だったのです。

「へエ——、驚きましたな。新助さんという人には逢ったことがありませんが、

お嬢さんを縛るのはどうかしていますよ、私が行ってよく話してやりましょう」
「何分宜しく願います。新助だって、そんな無法なことをする人間じゃ御座いません」

佐兵衛にくれぐれも頼まれて、平次はぼんやり外に出ました。

「親分」

「何だ、ガラツ八か」

「三輪の親分が、あの綺麗な娘を縛って行ったんだってネ、罰ばちの当った野郎じゃありませんか」

「何をつまらない」

「だってそうじゃありませんか、自分が殺した覚えおぼがあるものなら、翌る日も同じ時刻に、重詰じしつづめの小風呂敷包なんか持って、馬道まで行きやアしません」

「それに、馬道から浅草橋御門まで行くうち、あの娘が後ろを振り返って見たかつて親分訊きなすったが、あれは成程凶星だ、後ですっかり恐れ入ったぜ、

——後ろ暗いところのある人間なら、後も振り向かずには帰るってことはない。

——ひよいと、これだけの事を考えるんだから、親分の脳あたまはたいしたものだ」

ガラッ八は首を傾かしげたり、鼻の先を撫でたり、独りで感心しております。

「それだけ判りや、手前てまえも一本だ。八丁堀へ飛んで行って、笹野の旦那にそう申上げて見るがよい。お嬢さんはその場で縄を解かれるから——」

「親分は？」

「俺は他に用事もあるから、もう一度此家ここの支配人に逢って見る」

「有難てえ、あっしの口一つで許される段取りになると、手もなくお嬢さんの

恩人だね」

「まアそうだ」

「八五郎さん——と来たらどうしよう」

「馬鹿だね」

平次はそう言いながらも、この剽軽ひょうきんな男、——ガラッ八の駆けて行く後姿を見ておりました。

話は飛びますが、平次が予言した通り、八丁堀へ引いて行って、奉行所のお白洲へ突出す迄したしらべの下調をされていたお絹は、ガラッ八の弁明でその日のうちに許され、佐兵衛を呼出して、横山町の自宅へ帰しました。

「畜生、ガラッ八の野郎、つまらねえところへ出しや張る」

三輪の万七とお神楽かぐらの清吉はプリプリしておりますが、与力の鑑識めがねでするところへ、文句の付けようもありません。

新助の方は止め置いて、二三日責めせました。弥三郎さえいなければ、お絹とめあわせられて、越後屋の跡取あととりになることは、あまりにも明白な新助だったの

です。

お絹が弥三郎に未練があつて、毎日浅草へ出かけるのを、新助は知らない筈もなく、知つて嫉妬心やきもちこころを起さないとしたら、それは嘘になります。

「お絹さんが浅草とやらへ通うのは、店中の評判ですから、私もよく存じております。弥三郎が家出した後、私とお絹さんをめあわせるという下相談もあつた位ですから、私もお絹さんの出歩きを苦々しいとは思いましたが、それ位のこと、人一人殺そうとは思いません。第一私には、そんな恐ろしい毒薬を手に入れようがありません」

口不調法なほど実直な新助は、これだけの事を何べんも何べんも繰り返して言うだけで、それ以上に隠し事もかけひき駈引もあろうとは思えなかつたのです。

「旦那、見込違いで御座いました。新助という男は、人を殺せるような性たちの間では御座いません。あれは商売外の事はぼか白痴も同様の男で御座います」

四日目に、三輪の万七も到頭兜かぶとを脱いでしまいました。縛って来た万七が見込違あやまちいと言うのを、笹野新三郎、吟味ぎんみ与力よりきでも、留めて置くほどの証拠も自信も持もっていません。

七

事件はその儘ままうやむやに葬ほうむられそうでした。三輪の万七も間の悪さを我慢して、ちよちよいちよい顔は出しますが、暫くは手の下しようもなく、平次はガラッ八はちに言い付けて、横山町一円いちえんに泳がせましたが、名題なだいの早耳はやみみも、大した面白い話を聞き込んだ様子ようすもありません。

「三輪の万七親分かぐらは、お神楽かぐらの清吉きよきちをうんと働かせて、新助しんすけの身持みもちと、越後屋へ入るまでの奉公ほうこう先を洗すすっていますよ」

ガラツ八はそんな事を言つて来ました。

「フム」

平次の返事は一向張合がありません。

「厭が応でも、もう一度新助を縛る積りなんだね、——ところが、新助は生え抜きの米屋の手代だが、主人の弟の民五郎は、上方で薬種屋をやっていたことがあるんだそうですぜ」

「何だと？」

「薬種屋ならどんな毒薬でも手に入るでしょう」

「誰がそんな事を言った」

「番頭の茂助爺さんですよ。あの親爺は算盤そろばんの事しか知らないのかと思うと、四十年も人の飯を食つただけに、なかなか気の付くところがありますよ」

「フーム」

「親分がまた腕を組んだ、この双六すじろくも上がりが近いぜ。ね、お静さん——おつと姐御あねご、この秋は少し遠っ走りして、湯治とうじにでも行こうじゃありませんか」
ガラッ八はそう言つて、晩の支度にいそいそと立ち働くお静の美しい後姿を見るのでした。

全く、このガラッ八の予言も見事に当りました。

翌る日の朝、越後屋から急の迎え。

「旦那が殺されて、新助どんが深傷ふかでを負わされました。すぐ親分に——」
と言う使いの口上を半分も言わせず、平次は妻楊子つまようじを叩き付けるように、ガラッ八うながを促して、横山町へ駆け付けました。

越後屋へ行つて見ると、全く文字通り上を下への騒動です。

「親分、た、大変なことになりました」

飛んで出たのは、少し狸たぬきに似た老番頭の茂助。

「飛んだ事だね、番頭さん」

平次は言い残して奥へ入りました。

薄暗い仏壇の奥、独り者の主人が昼でも時々こもは籠っている八畳の間には、床から抜け出したままの佐兵衛、血の海の中にこと切れております。

傍には弟の民五郎、妙にウロウロして、何事も手の付かぬ様子で平次を迎えました。さすがに落着きを見せる積りか、血飛沫ちしぶきの中に、おののく膝を突いて、

「親分、御苦労様で」

そんな事を言っております。

平次は黙って会釈して、念入りにその辺を見廻しました。曲者くせものは雨戸を外して入ったらしく、縁側には泥足の跡などを付けておりますが、部屋の中には別にそんなものはなく、主人の佐兵衛は熟睡じゅくすいしているところを、虫のように刺さ

れたらしく、少し乗出し加減に虚空を掴んでおりますが、深々と咽笛をえぐつた傷の様子では、声をも立てずに死んだ様子です。

「恐ろしい腕前だ」

平次は思わずガラッ八を振り返りました。寝ている者の首が、半分千切れるほど切るのは、非凡の業か腕力がなければなりません。

曲者の遺留品というのは、蠟塗の脇差の鞘が一本だけ。

「この鞘に見覚えはありませんか」

誰へともなく平次が言うのと、

「へエ、そ、それは私の品で——中味は隣の部屋にあります」

待ち構えたように民五郎が言います。

次の間は深傷を負わされた新助が寝ている、納戸兼用の六畳です。

一足入ると、ここは更に惨憺たる有様です。かなり取乱した中に床を敷いて、

町内の外科が、新助の傷の手当をしているところへ、

「災難だったね、番頭さん」

平次は声を掛けます。

「へエ——、私はよろしゅう御座いますが、旦那がお気の毒で、何しろ昼の疲つかれですっかり寝込んでいるところをやられたんですから」

新助はおどおどした顔を挙げました。

「曲者の顔を見なかったのかい」

「今申上げた通り、何かに驚いて、ハッと飛起きると、行燈あんどんは消えて真つ暗でしよう、——旦那、旦那——と声を掛けるといきなり後ろからバサリとやられたんで——」

「それから」

「恥かしいことですが、それつきり眼を廻してしまいました。呼び起されて見

るとこの有様で、へエ——、何とも申訳御座いません」

「謝らなくたっていい、——とところで、その主人を呼んだ時隣の部屋に灯が点
あやま
いていたのかい」

「点いておりました、へエ」

「つか疲れちゃ悪い、横になった方がいいだろう。全く災難だったね」

平次は新助の後ろへ廻って、外科の手当をしている傷を見せて貰いました。

右の肩下から、五寸ばかり定規で引いたように斬り下げた刀創は、かたなきずさまで深

いものではありませんが、血の出ようがひどいようですから、随分気の弱い者

は眼位は廻すでしょう。新助は長年の米屋奉公で鍛えて、きた身体こそ立派ですが、

人間は少し不愛想で、何となく臆病らしいところさえあります。

「これが曲者の捨てて行った脇差かい」

「へエ」

平次は血刀を取上げて縁側へ出ました。朝の光りにすかして、切っ先から柄^{つか}、目貫^{めぬき}まで、丁寧^{めいじん}に調べておりましたが、何を考えたか、風呂敷を借りてそれを包むと、

「この脇差はちよいと借りて行くぜ」

そう言つて、今度は念入りに部屋の中を捜し始めました。

押人^{おし}の中、箆^{たんす}筒の上、脱ぎ捨てた着物、一つも平次の目を脱^{のが}れるものはありません。それが済むと、縁側へ出て、便所の手水場^{ちようずば}の下をツクツク眺めております。曲者が何か洗ったものか、その植込みや砂利は、ほんの少しですが、薄くなつた血が流れています。

「親分、見当は？」

ガラッ八は心配そうに後から尾^ついて来ました。

「まるつきり解^{わか}らないよ」

「へエ——」

「この家から人間を一人も出さないように手配してくれ。俺はちよいと出て来る。それから新助はなるべく一人でそつとして置く方がいいぜ、手負いは気が立っっちゃ悪い」

「どこへ行きなさるんで——」

ガラツ八は追っかけて訊きました。

「まだ飯も食わないじゃないか」

「あ、っ、し、だ、つ、て、食、い、ま、せ、ん、よ」

「我慢しな」

平次は風呂敷に包んだ脇差を小脇こわきにフラリと外へ出ました。

八

その後へやって来たのは三輪の万七とお神楽かぐらの清吉でした。

平次がやったと同じような探索たんさくをして、一度門口へ出ましたが、思い直したように取って返すと、支配人の民五郎に縄を打って引立てます。

「八五郎兄哥あにい、念のために言つて置くがネ、これだけ証拠ほしの揃つた犯人を、平次親分がなぜ挙げなかつたんだ。後で縄張りがどうのこうのと言わないことだぜ」

万七は冷たい言葉を浴びせると、ガラッ八を尻目に弥次馬の群がる中を、腰縄を打つた民五郎を追つ立てて八丁堀へ引揚げるのでした。



©2017 萩 柚月

吟味与力の笹野新三郎は、その時丁度平次と話し込んでおりました。

「万七が越後屋の支配人を縛って参りました」

取次がそう言うのと、

「何、万七が？——兎に角庭へ廻せ」

その声を聞くと万七は、待ってたと言わぬばかりの顔を縁側へ出しました。

「旦那様、平次から御聞きで御座います。越後屋の主人を殺し、手代に深傷ふかでを負おわせた、支配人民五郎を挙げて参りました。浅草あみがさで編笠かき乞食こじきの弥三郎を毒

害したのも、此奴こいつの仕業しわざで御座います」

「フーム」

笹野新三郎が顔を挙げると、庭へはもう、お神楽の清吉が、民五郎を引据えております。

「兄哥、とうとう民五郎を挙げたね」

同じく縁側へ滑った平次は、天を仰いで歎息するようにこう言いました。

「それが悪いのか、銭形の、——弥三郎殺しを新助の仕業と思つたのは俺の鑑識めがねの違いだったが、今度ばかりは外れはずつこのねえ証拠がある」

万七は少しいきり立ちます。

「二人共、静かにせぬか、——万七、何よりその証拠と言うのを聞こうか」

笹野新三郎は二人の争いをなだめてこう言います。

「申しますとも、第一に主人の佐兵衛と、養子分の新助を殺せば、あの身代は民五郎の自由になります。佐兵衛を斬つたのは、かなりの腕前ですが、民五郎は若い時なら、者の仲間まじに交つて、腕も少しは出来るって言います。それから上方で薬屋をやつた事もあるそうですから、弥三郎を殺した恐ろしい毒薬を持っていた筈です」

「それに、曲者は外から入ったように見せてありますが、縁側の泥足は、すぐその下の沓脱くつぬぎにあった下駄でつけたもので、柔かい庭土の上には足跡もありません。曲者は内の者に決っております」

——随分へまな証拠を拵えたんだネ——平次はそう言おうとして口を緘つぐみました。万七と争ったところで仕様がなと思ったのでしよう。万七はしかし委細いさい構わず続けました。

「新助は怪しいが、自分であれだけの傷を背中へつけられるわけはなく、番頭は年寄で荒っぽい事の出来る柄ではありません。もう一つ、動きの取れない証拠は、主人と新助を斬った脇差はこの民五郎のもので、中味は銭形のが持っている筈で御座います」

万七の言葉には淀みよどもありませんでした。

「それは非道だ。私は人を殺すような人間じゃありません。まして自分の兄を

手にかけるなんて、聞いても恐ろしい——」

民五郎はあまりの事に転倒して、縛られたまま身を揉みますが、繩尻なわじりを押えたお神楽の清吉は、グイグイと引いて大地に押付けております。

九

「銭形の、民五郎が下手人でなきやア、誰が殺したんだ。繩張なわばりは繩張、物の道理は物の道理だぜ——。わざわざ笹野の旦那をおつれして、見事俺に恥を搔かせる積りだろうが、そんなわけにゆくものか」

万七はしきりといきり立っております。

「そんな訳じゃないよ、三輪の、口で言っても解らない事があっちゃ、人間の命にかかわるから、旦那はじを始め皆んなの目で見て貰おうというんだ」

平次はそれを宥めながら、横山町の越後屋の店から入って行きました。人殺しの現場へ、吟味与力を引張り出すということは、なかなか容易ならぬことでもあったのですが、新三郎は思う仔細があるのか、黙って平次について行きました。それを迎えたガラッ八は、不思議な事の成行に、大きな口を開いて挨拶するのさえ忘れております。

惨憺たる中を一通り見て廻った後で、平次は笹野新三郎と万七を縁側に誘い出しました。

「この手水鉢ちようずばちの下の植込みと、白い砂利が血に洗われております。これは曲者が主人を斬った後で脇差わきざしの刃を洗ったのでございます。脇差の柄つかの真田紐さなだひもが少し濡れておりますから、間違いは御座いませぬ、——人を一人斬って、二人目を斬る前に、刀を洗うのは、並大抵の曲者にしては悠長過ぎはしませんでしよるか」

平次は重大な謎を投げかけました。それを解けるのが、——いつぞや平次が女房のお静に髭ひげを剃らせているのを見た、ガラッ八だけかもわかりません。

「——それからこの柱を御覧下さい、かなりひどく血が付いておりますが、これは手や着物から付いたのではなくて、傷口から飛沫しぶいたのです」

「——」

「主人の死体からも新助からも、遠い、この柱のこっちの側に血が飛沫あかりく筈はありません。それに、新助は先刻、曲者に斬られた時主人の部屋の灯あかりが見えていた——と言っていました。ここで斬られて、後ろの灯が見える道理があるのでしようか、新助は斬られてすぐ目を廻しているので御座います」

「それでは下手人は誰だ」

笹野新三郎、たまり兼ねて言いました。

「お待ち下さいまし、この柱にこう脇差の柄つかを縛って——」

平次はそう言いながら、自分の持つている風呂敷を解き、中から血だらけな脇差を出して、その柄を風呂敷で柱に縛り付けながら続けました。

「こう三尺五六寸のところへ脇差を縛り、刃を下へ向けて、切っ先に肩先を当て、スーッと上へ起ち上がると、人間の身体が背後うしろから斬り下げられたように真っ直ぐに下へ傷が付きます。新助の背中の傷は、定規じょうぎで引いたように真っ直ぐに斬り下げてありますが、人間の手で斬ったんでは、あんなに行くものでは御座いません」

そこまで聞くと、半身を白布で巻いて、ウンウン唸っていた新助は、いきなり起上がって這出つかまそうとしました。

「八、その野郎を捕つかまえろ。臥ねている人間の首を半分斬落した恐ろしい力だぞ、手負いだと思つて油断するな」

「何をッ」

猛烈な取っ組み合いが始まりました。

平次が手を貸さなかつたら、本当にガラッ八もどんな目に逢わされたか知れません。

「新助、まだ逃げるには早いぞ、もう少し聞かせることがある。この脇差の柄つかを縛った前垂まえたれをどこへ隠した。先刻まで、少し血が付いているのに気が付かずに、そこへ放つて置いたろう、——俺はそれを隠させる積りでここを明けてやつたんだ。俺が脇差の柄ぬかの付いてるのを眺めていると、手前てまえは急に糠だらけの前掛を気にしていたじゃないか」

「——」

新助はすっかり恐入ると急に背中の傷が痛み出したらしく、縛られたまま置の上へ崩折くずおれました。

三輪の万七とお神楽の清吉は、何時の間に帰ったか、もうその辺にはいませ

ん。

「恐れ入ったね、親分、三輪の万七とお神楽の清吉がコソコソ逃げ出した恰好はなかつたぜ」

「馬鹿ッ、つまらないことをいうな。俺は人を縛ると後の気持がよくねえ、——だが、あの野郎は助けるわけに行かなかつたよ。もつとも、あれほどの悪党でも、主人の血の着いた脇差で自分を切る気がなかつたのは不思議さ、余つ程、気味が悪かつたんだね。それでどうとう露顕ろけんしたのも因縁いんねんだろう」

平次はそう言いながらガラッ八うながを促して家路に向いました。

言うまでもなく新助は越後屋を乗取つて、お絹を手に入れる積りだったので、弥三郎を殺した毒薬は、民五郎が物好きで持っていたのを、用よう筆筒だんすから盗み出したもの、これはお白洲しろすで判りました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和八年十一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

血潮と糠



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>